

人面獣心

藍川中学校 3年 田中 孔徳

とある町にこんな都市伝説があった。街外れにあるキャンプハウスで複数人、貸し切り状態で四日間泊まると、最初に来た人数より一人居なくなっているらしい。それも気付く気付かないの話ではなく、その一人のキャンプについての記憶がないのだ。これはそのキャンプハウスの都市伝説を聞いて泊まりに来た五人組の話である。この都市伝説は絶対だ。

森の中心部、森の木々に日光が遮られ、日が出ている間でも薄暗い。ひぐらしの鳴き声が語りかけてくるように耳に入ってくる。木々の根元には虫の死骸が散らばっている。そんな不気味な環境にソレはあった。赤みがかった木造の建物が静かにそびえ立つ。大学のサークル仲間の四人と俺、男三人女二人で都市伝説の検証に来ていた。ここに来るまでみんな車の中で賑やかに話していたのに、この森に入ってから段々と口数が少なくなっていく目的地に着いた時には車窓から森の景色を眺めていた。みんながあまりにもぼうっとしているので運転手だった俺は「降りるよ」と告げて外に出た。想像以上に気味の悪い場所だ。俺に続いて後部座席から怯えながら手を繋いで一緒に出てきたのは、遠藤さんと橘さん。次に降りて来たのは、滝沢と田中。全員が荷物を持った所でハウスにみんなが入った。

中に入るとリビングがあり、思っていたよりも広くて綺麗な。部屋は丁度五つあり各自、部屋へ行き荷物を整理する事にした。部屋は窓がない六畳間でシングルサイズのベッドとメモ用紙が置いてある丸テーブルそしてゴミ箱。一人で居るには落ち着いていて丁度良い。荷物を整理し終えたらリビングに集合する事になっているので、荷物を整理し終えた俺は部屋を出た。

リビングには既に四人集合していた。これから何をして四日間の暇をつぶすか決める所だ。トランプをしながら話し合い、三十分程で予定は決まり後はトランプパーティーだ。昼にここに着いて、いつの間にか夜遅くなっていた。まさか大学生がトランプと肉とジュースとトークだけで何時間も遊ぶとは……。パーティーも終わりにしてみんな寝ることにした。部屋に戻る

とメモに何やら書かれているのに気が付いて読むことにした。

「」

何を伝えたいのかさっぱりだった。頭の片隅に置いておく事にして寝た。

二日目。今日は一日中バーベキューで終わった。夜になるにつれて俺も含めてみんな表情が暗くなっているのに気付いた。その理由は恐らくみんな誰が居なくなるのかも分からない中、都市伝説の検証をしている。当然怖い気持ちがある。みんなが迷う程だ。その日は暗いおやすみを最後に一日を終えた。結局迷いの答えはでないまま、ただ恐怖と不安が迫ってきていた。いつの間にかみんなの事ではなくもう自分を守る事、自分のことだけでいっばいだ。……怖い。……不安だ。

三日目。今日は都市伝説について話し合う日だ。俺も皆の顔も狂気じみている。この企画はみんなともっと仲良くなるためのもの。そんな中で一人を裏切る……。まともでいられる訳がない。不安と恐怖が襲ってくる。結局、話し合いが始まったのは夜になってからだ。日中は何をしていたか記憶がない。手の中に安心がある……。バーベキューで使った包丁だ。みんながリビングのソファに座った瞬間、田中が言い放った。それが都市伝説の始まりとなった。

「この中の誰かが一人を殺すのかなあ……。だとしたら誰なんだ！ 答えろよ誰か！」

皆の顔が段々、化け物のようになり狂い始めた。一人一人が不安と恐怖を言葉に乗せて叫ぶ。滝沢が叫ぶのを止めて静かに語りだす。

「田中、お前が話を持ってきやがったよなあ。仕組んでたんじゃねえのか？ 殺そうとしたんじゃねえのか？」

八つの赤い目玉が田中に向いた、田中は逃げ出した。玄関は鍵が掛かっついて開かない。扉を強く叩きながら叫び続ける。俺たち四人が田中の周りを囲んだ。今あるこの感情を消すために四人は一斉に手の中にある安心を振り上げ振り落とした。気が付くと目の前には血、肉、骨、臓物が散らばり、狂喜に満ちた笑い声が響いていた。

四日目。散らばった赤い物を四人で森の土に埋めた。跡が残らないようにハウスを隅々まで綺麗にした。土を掘った時、下の方に赤い土と白い棒のような物があつた。都市伝説の謎が全て解けた。

「人が都市伝説を疑い、都市伝説を創る」

人は恐怖に陥ると、理性を失い、化け物に変わる。